

## 問題1

さて、今回のテーマは「わがふるさとみかわは、三河三河」。  
この「三河」とは、現在のどの地域ちいきのことでしょ  
うか？

- (1) 名古屋市の一部      (2) 愛知県全体  
(3) 愛知県東部          (4) 愛知県西部

## 解説

現在の愛知県は江戸時代まで「尾州びしゅう」(尾張)と「三州さんしゅう」(三河)の二つの州に分けて捉えられていました。明治時代になり、三河の各藩(9藩)は「額田県」となり尾張の藩は「名古屋県」から「愛知県」となったのですが、政府の方針でこの二つを統合して「愛知県」としたのです。これに対して額田県側が反対運動(三河分県運動)を起こしましたが、国会で否決され現在に至っています。三河は愛知県の東部に当たり、矢作川やはぎや豊川が西三河・東三河の平野部を形成し古くから独自の文化を創り上げてきました。



尾張と三河

## 問題2

徳川家康公が生まれたのは、三河、岡崎城。それは天文11年12月26日。西暦では1542年、十六世紀の中頃。その頃、世界はどんな時代だったでしょう  
うか？

- (1) アメリカのライト兄弟が世界初の飛行機を発明した時代  
(2) モンゴルのフビライ・ハンがユーラシア大陸を席捲した時代  
(3) 聖地エルサレムをイスラム教国から奪還しようと十字軍が派遣された時代  
(4) 大航海時代を経て、ヨーロッパ諸国が世界に進出した時代

## 解説

15世紀から17世紀前半にかけて、ポルトガル・スペインを中心とするヨーロッパ諸国が地球規模の遠洋航海を実施して新航路・新大陸を発見します。この積極的な海外進出を行った時代を大航海時代と呼んでいます。特にバスコ＝ダ＝ガマのアフリカ・インド航路開拓、コロンブスのアメリカ大陸到達、マゼランの世界周航などが行われ、世界史の上でも植民地体制が確立される時代として捉えられます。家康公が生まれた翌年の天文12年(1543)には、種子島たねがしまに鉄砲が伝わるなど、日本にもその影響が出始めたのです。



東インド諸島図(1570年頃)

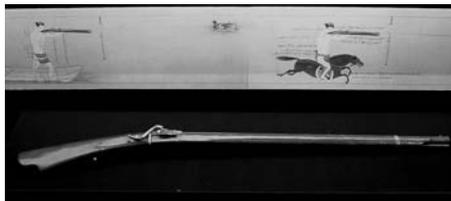
## 問題3

前問と同様、家康公が三河、岡崎城で生まれたころ、日本の国内はどんな状況だったでしょうか？

- (1) 鉄砲が伝来し、キリスト教が伝わり、国内は戦国乱世のど真ん中。
- (2) 武家の世になるも民衆は不安の中、法然、親鸞が浄土思想を説く。
- (3) 応仁の乱が始まり、京の都で東軍と西軍が争う。
- (4) 南北朝が合一。室町幕府は最盛期を迎え、金閣寺が建立された。

## 解説

戦国時代を、「応仁の乱(1467年)」を「始まり」、「大坂夏の陣(1615年)」を「終わり」と考えた時、家康公の生まれた年はちょうどその中間点に当たります。正に戦国乱世のど真ん中に生まれ、生涯その平定のために働いたということになります。国内は鉄砲やキリスト教が伝わり、戦国大名たちにとってヨーロッパ諸国の影響が始める時代でもありました。それらをうまく取り入れ、時代を変えていくリーダーが求められる時代となっていくのです。



種子島の火縄銃(愛知万博)

## 問題4

前問と同様、家康公が三河、岡崎城に生まれたころ、その三河地方を取り巻く状況はどうだったでしょうか？

- (1) 松平氏が西三河を統一して安定していた。
- (2) 三河は今川氏の領国となり、岡崎城には今川の代官が入城していた。
- (3) 駿府の今川と尾張の織田の勢力圏争いの渦中にあった。
- (4) 勢力を伸ばした一向宗門徒が、三河を統治していた。

## 解説

家康公の祖父 松平清康が家臣に殺害されて以後、尾張の織田信秀による安城城進出、それに伴う松平一族の離反が続き、岡崎城の松平広忠(家康公の父)は窮地に立たされてしまいます。広忠は自分の後ろ盾になっていた駿河の今川義元に救援を依頼、義元は大軍を率いて織田信秀と岡崎の小豆坂で戦いました(第一次小豆坂の合戦)。この戦いは痛み分けとなりますが、織田氏と今川氏が岡崎城の眼前で争うという厳しい状況の中、家康公が誕生したのです。



小豆坂古戦場碑(岡崎市)

## 問題5

この時から家康公の75年の生涯が世を正し、三河武士たちが育ち泰平日本を築いてゆきました。家康公に仕え、家康公の偉業を支えた三河武士たちは、江戸開府に伴い全国各地の藩主(大名)となり、江戸時代を通じて各藩を治めました。幕末期、全国のおよそ280の藩の中で、三河武士たちの子孫が藩主だった藩はおよそいくつあったのでしょうか？

- (1) 30藩 (2) 60藩  
(3) 120藩 (4) 240藩

## 解説

江戸時代の政治体制を「幕藩体制」と呼んでいます。これは幕府の政治と藩の政治を結合した言い方で、各藩は幕府から朱印状を發行してもらい、領地の保証を受けながら独自の政を行うという体制でした。中央集権的な政治体制と捉えるよりもむしろ地方分権的な体制といえます。このような体制の中で、大名たちは江戸を守るという役割を負っていました。徳川創業期以来の三河武士たちは、幕府にとって信頼できる存在として、多くが大名として取り立てられました。そして全国に優れた城下町を建設したのです。



大多喜お城まつり(千葉県大多喜町)

## 問題6

三河の地の発展を支えたものは、山間部と海(三河湾)を結ぶ様々な河川の舟運と言われ、三河の語源を「御川」として現在の川を充てる説があります。その川とは、どれでしょうか？

- (1) 境川 (2) 豊川  
(3) 長良川 (4) 矢作川

## 解説

「三河」の語源については諸説あり、矢作川・乙川・豊川の三つの川を意味するというもの、美しい川(美川)が流れる地域を意味するもの等々があります。いずれにしろ、この地域が川の恩恵を受けて成り立っている地域であることを表したものであり、その中心となる河川が矢作川であることは明らかです。矢作川はもともとは多くの支流を持ち、氾濫も多くありましたが、舟で荷を運搬する水路としての利用も多く、舟運は人々の暮らしを支える重要な流通手段でした。人々が崇敬の念を込めて矢作川を「御川」と呼んだのも頷けます。



矢作川・乙川合流地点(岡崎市)

## 問題7

古代より「国造」として三河地域を支配していたと考えられる氏族は次のうちどれでしょうか？

- (1) 大伴氏 (2) 葛城氏  
(3) 蘇我氏 (4) 物部氏

## 解説

「国造」とは、大和朝廷の氏姓制度下で与えられた地位の一つであり、国々の支配者を指します。その地位に就くことができたのは「氏」としての地位を認められた血族集団に限られ、大伴氏・中臣氏・物部氏や葛城氏・蘇我氏など、朝廷内の職務や畿内の土地名を氏の名義として与えられていました。

三河国では物部氏が国造として支配していた様子が見られます。真福寺・北野廃寺(岡崎市)などの建造物や遺跡、舘播神社の記録などから分かっています。「物部」は「ものふ」とも読まれ、武人としての職務を負っていたと考えられます。



北野廃寺跡(物部氏の氏寺／岡崎市)

## 問題8

親鸞の高弟による念仏説法によって、主に西三河平野部の民衆の間に広まった仏教の宗派は何でしょうか？

- (1) 時宗 (2) 浄土真宗  
(3) 真言宗 (4) 禅宗

## 解説

「三河念仏相承日記」(東泉寺蔵)によると、鎌倉時代の前期に親鸞の高弟であった真佛・顕智らにより、矢作薬師寺で念仏説法が行われたとあります。その後、三河に滞在した顕智による教化によって、平田(大和町妙源寺)・赤波・菅生(満性寺)・作岡(岡町)の各所(いずれも岡崎市)に「道場」が開かれ、この地域の真宗門徒拡大の起点となりました。一説には、親鸞自身が妙源寺の柳堂や勝蓮寺(矢作町)の柳堂で念仏説法を行ったとも伝わります。



妙源寺柳堂(国重文／岡崎市)

## 問題9

前問の、親鸞の高弟が念仏説法を行ったとされる三河の地はどこでしょうか？

- (1) 西郡(蒲郡市) (2) 深溝(幸田町)  
 (3) 松平(豊田市) (4) 矢作(岡崎市)

## 解説

矢作の地は奈良時代より宿場町として栄えていたと考えられます。主に関東で布教活動を行っていた親鸞やその高弟たちが、京に上る際に矢作宿に逗留したと考えられます。薬師寺は天台宗の寺院で、現在その姿はありませんが、矢作川河床遺跡からは「薬師寺」の文字が刻まれた瓦も発見されており、その存在が明らかになっています。矢作川の舟運と東海道が交わるこの地が、古くから重要な場所であった様子が窺えます。



「薬師寺」刻字瓦(矢作川河床遺跡)

## 問題10

足利氏が深く帰依し、主に東三河や西三河山間部の民衆の間に広まった仏教の宗派は何でしょうか？

- (1) 時宗 (2) 浄土真宗  
 (3) 真言宗 (4) 禅宗

## 解説

足利尊氏が臨済宗の禅僧である夢窓疎石に帰依して以来、禅宗、とりわけ臨済宗は足利将軍家の保護を得たと考えられます。三代将軍足利義満は、1386年に相国寺を創建した後、五山十刹の制を整え、京都五山(天龍寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺)と別格の南禅寺を幕府の保護下に置きました。尊氏は先祖のふるさともある額田の地に立派な臨済宗寺院の創建を考えていましたが、孫の義満によって実現されました。それが天恩寺です。以来、三河の山間部や東三河の地域には曹洞宗を含めた禅宗の寺院が多く建てられたと考えられています。



天恩寺(国重文/岡崎市)

## 問題11

家康公を生んだ三河国 額田郡(現在の岡崎市と額田郡幸田町を中心とした地域)は、鎌倉幕府を開いた源 頼朝と深い関係があり、鎌倉幕府の直轄地でもありました。額田郡と源 頼朝とはどのような関係があったのでしょうか？

- (1) 源 頼朝の生誕地が額田郡であった。
- (2) 源 頼朝が平家打倒の兵を挙げたのが額田郡であった。
- (3) 源 頼朝の父が、もともと額田郡を含む三河国の国司であった。
- (4) 源 頼朝の祖父(母の父)が、額田冠者(額田郡の領主)であった。

## 解説

源 頼朝の母は熱田神宮大宮司 藤原季範の娘(由良御前)です。この季範には従四位下の官位の他に「額田冠者」の名が載せられており、額田地域と深い関係を意味していると考えられます。事実、季範の子である祐範が「額田法橋」として、孫の寛伝が「額田僧都」として瀧山寺の僧になっていました。頼朝にとっては叔父、従兄弟に当たる人物です。祐範は頼朝が伊豆に流された時、従者を付け経済援助も行ったと伝えられます。頼朝と額田、とりわけ瀧山寺との関係を表しています。



源頼朝生誕地(名古屋市熱田区)

## 問題12

源 頼朝により、三河の初代守護に任じられたのは誰でしょうか？

- (1) 安達盛長
- (2) 北条時政
- (3) 梶原景時
- (4) 源 義経

## 解説

頼朝は鎌倉幕府を開いた際、母のふるさとでもある三河国を「関東御分国」と位置づけ直轄地とします。その際に実弟の範頼を三河国司(三河守)としましたが、範頼の失脚後は自分の右腕でもあった安達盛長を三河守護に任じました。盛長は主に東三河を中心に「七御堂」を建立、その権威を表します。特に西尾市吉良町に現存する「金蓮寺」は、現代に当時の仏殿の様式を伝える貴重な建造物として国宝に指定されています。また盛長の墓所は蒲郡市の長泉寺にあります。



金蓮寺(国宝/西尾市)

## 問題13

天台宗の寺院ですが、源 頼朝がらんによって伽藍がらんが整備され、足利尊氏あしかがたかうじによって本堂ほんどうが建立され、徳川将軍家からも手厚い保護を受けたのは、どの寺院でしょうか？

- (1) 是の字寺ぜ たきざんじ (2) 大樹寺だいじゅじ てんおんじ  
 (3) 瀧山寺 (4) 天恩寺てんおんじ

## 解説

瀧山寺に残される記録(瀧山寺縁起)には、源 頼朝や足利尊氏との深い関係を示す記述が見られます。天台宗の寺院として多くの修験者を集めていた瀧山寺は、時々の権力者たちから篤い崇敬を集めていたことが窺えます。特に本堂は南北朝の頃の建造と考えられ、足利尊氏による建立が伝えられており国の重要文化財に指定されています。また家康公からも手厚い保護を受けますが、三代将軍 家光いえみつによって境内地に瀧山東照宮(国重要文化財)が創建されました。



瀧山寺本堂(国重文/岡崎市)

## 問題14

京の仏師 運慶・湛慶の作で、前問の寺院に安置され、源 頼朝の齒と髭が体内に埋め込まれている、頼朝と等身大の国指定重要文化財の仏像を何というのでしょうか？

- (1) 薬師如来立像やくしにょらいりつぞう  
 (2) 聖観音(菩薩)立像しょうくわんのんぼさつ  
 (3) 阿弥陀如来立像あみだにょらい  
 (4) 如意輪観音(菩薩)立像にょいりんくわんのん

## 解説

頼朝と従兄弟の寛伝とは特に深い付き合いがあったと伝えられ、日光山満願寺の座主(別当)に抜擢されます。四年後、瀧山寺に戻ることになった際には六十六郷の知行地を宛がわれ、「額田僧都」を名乗ることになったのです。頼朝の死去に伴う三回忌には、寛伝により「総持禅院」が建立され、運慶、湛慶父子の手による「聖観音三尊像」(聖観音・梵天・帝釈天—国重要文化財)を安置しました。特に聖観音立像の高さは頼朝の身長と同じであり、頭部内に口髭と齒が埋め込まれています。

聖観音立像  
(瀧山寺蔵 国重文/岡崎市)

## 問題15

承久の乱(承久3年(1221)：後鳥羽上皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、幕府に鎮圧された事件)の後、その軍功により三河国の守護になった足利一門の当主は誰でしょうか？

- (1) 足利尊氏 (2) 足利直義  
(3) 足利義氏 (4) 足利義政

## 解説

足利義氏は尊氏より五代前の第三代当主です。鎌倉幕府の執事でしたが、本拠地の上野国足利荘(足利市)では菩提寺である「鏝阿寺」の伽藍を整備したことで有名です。また隣接して「足利学校」がありますが、関東では最大の学校として古くから儒教および漢籍の研究や学問が盛んに行われました。第九代校主の三要元偈は家康公の命を受けて、京都伏見の圓光寺で伏見版とよばれる出版事業に携わったことでも知られます。300年以上の時を経て、義氏と家康公の、三河を介した深い縁を思います。



足利義氏像(鏝阿寺蔵/足利市)

## 問題16

足利氏が三河守護になったことで、矢作川流域にはその一族が配され、根を下ろします。本家の守護所とともに、細川氏、仁木氏などの発祥の地となったのは現在の何市でしょうか？

- (1) 安城市 (2) 岡崎市  
(3) 豊田市 (4) 西尾市

## 解説

足利義氏が一族を配した地は、主に矢作川に沿った地域でした。これは、矢作川が東西を分かち、防衛上の重要な役割を持つ川であったからだと考えられます。源氏と平氏の戦いでは平氏の軍を矢作川で迎え撃った源頼政の例もありました。現在の岡崎市域では、細川・仁木・長瀬・戸賀崎(戸崎)・上地などに一族が根を下ろしました。結果、南北朝の争いでは、新田義貞の軍と、それを迎え撃つ足利一門が矢作川をはさんで対峙した戦いになったのです。



細川氏初代墓(蓮性院/岡崎市)

**問題17**

前問同様、その後の時代に大きく関わってゆく吉良氏、一色氏、さらには駿河守護となり家康公の時代に関与する今川氏などの発祥の地となったのは現在の何市でしょうか？

- (1) 安城市                      (2) 岡崎市  
(3) 豊田市                      (4) 西尾市

**解説**

足利一族が根を下ろした矢作川流域では、その下流域にも多くの一族が配されました。吉良・一色・今川などが該当しますが、現在の西尾市域です。吉良氏は現在の西尾城がある「西条吉良氏」と東条城の「東条吉良氏」に分かれました。後に勃発する「額田郡牢人一揆」も、この二つの吉良氏の争いがその遠因になっていると言われます。岡崎市域の仁木氏や細川氏と共に、彼らの子孫たちは室町幕府のもとで将軍家を支える地位に就き、各地の守護大名に任じられたりしました。



吉良東条城址(西尾市)

**問題18**

13世紀末ごろ、足利氏が三河とともに守護職を有していた国はどこでしょうか？

- (1) 伊豆                              (2) 上総  
(3) 駿河                              (4) 陸奥

**解説**

足利氏は三河国と上総国の守護に任じられていました。伊豆国の守護は北条得宗家(鎌倉執権)、駿河国の守護も同様に北条得宗家が務めていました。遠江国も鎌倉後期には北条一族(大仏氏)が守護に任じられており、東海道はほぼ北条一族で領有されていたこととなります。後に足利尊氏が将軍職になると、守護はがらりと変わることになり、三河出身の足利一族が多くの守護大名に任じられました。陸奥国は多くの地頭職が存在しましたが、守護職は特に置かれていませんでした。



上総国飯香岡八幡宮(千葉県市原市)

## 問題19

「太平記」には、足利尊氏が鎌倉幕府を倒すため京に攻め上る際に、足利一族の大勢力がある館に集結し、一族を挙げて京を目指す場面が描かれています。ある館とはどこのことでしょうか？

- (1) 熱田の館 (2) 知立の館  
(3) 矢作の館 (4) 吉田の館

## 解説

執権 北条高時の命を受け、後醍醐天皇の反乱鎮圧のために鎌倉を出立した尊氏でしたが、その時はすでに討幕の意思を固めていました(太平記)。兵の数は数百人と少なかったのですが、到着した三河国矢作の館にはこの地に根を下ろした一族や被官衆が集結し、尊氏と行動を共にすることを誓ったのです。兵の数は2万人と膨れ上がり、京の六波羅探題を攻め落とすことに成功しました。この矢作の館は現在の岡崎市明大寺町にあったのではと推測されますが、詳らかではありません。



足利尊氏像(浄土寺蔵/広島県尾道市)

## 問題20

三河国が足利一族の拠点であったことから、岡崎市大門のある神社に尊氏の石宝塔が残されています。何という神社でしょうか？

- (1) 上地八幡宮 (2) 土呂八幡宮  
(3) 八剣神社 (4) 矢作神社

## 解説

矢作川流域には足利一族が配されましたが、その被官衆(家臣)も多くが三河の地域に入ってきました。その内、額田地域には高氏、粟生氏、上杉氏、倉持氏らが入りましたが、大門周辺(便寺屋敷)には倉持氏の一族が多く居を構えました。現在の八剣神社付近には矢作川の渡河地点が存在したと考えられ、多くの人々が行き交う場所だったのでしょう。将軍尊氏の石宝塔が足利内蔵之尉という者によって建立され顕彰されたのではないかと考えられます。



足利尊氏石宝塔(岡崎市)

## 問題21

足利一族のうち、一色氏の家系に生まれ、後に家康公の政策ブレインとなり黒衣の宰相とも呼ばれた人物は誰でしょうか？

- (1) 金地院崇伝 (2) 角倉了以  
(3) 天海 (4) 三浦按針

## 解説

「家康公の政策ブレイン」と「黒衣の宰相」という部分から、金地院崇伝を指していることがわかります。崇伝はもともと室町幕府に仕える一色氏むろまちぼくふの家に生まれ、自らも十五代将軍 足利義昭あきの側近として活躍をしていましたが、義昭が追放され幕府が滅ぶと京都の南禅寺に入り出家をします。その後にはいくつかの臨済宗寺院の住持を経て、再び京都五山の最高位である南禅寺の住持となったのです。家康公の大御所時代に見出され、寺社政策や教育・外交のブレインとして活躍をします。武家諸法度や禁中並公家諸法度を起草した人物としても知られます。



金地院崇伝像  
(金地院蔵／京都市)

解答… (1)

## 問題22

徳川四天王してんのうの一人、榊原康政さかきげらやすまさの先祖は、失脚して伊勢国一志郡榊原村に移住し、榊原姓さかきを名乗った足利一族といえます。榊原康政の先祖は足利一門のどの家系でしょうか？

- (1) 今川氏 (2) 吉良氏  
(3) 仁木氏 (4) 細川氏

## 解説

仁木氏は足利尊氏に仕えて活躍をした義長の時代に三河国の守護となります。尊氏に重用され、一時期は伊勢・伊賀・志摩・三河・遠江の守護職を兼帯するまでになりました。しかし尊氏の死去に伴って他の幕僚から排斥され、伊勢国に逃亡します。後には守護職も解任され、義長の子孫はそのまま伊勢国の榊原郷に住み着き榊原姓を名乗ったのでした。榊原康政の祖父 清長の時代に碧海郡上野郷(豊田市上郷町)に渡り、後に松平家(親忠～清康の間)に仕えることとなります。



榊原氏菩提寺・林性寺(津市榊原町)

解答… (3)

## 問題23

松平初代といわれる親氏は、時宗の遊行僧となつて諸国を行脚し、三河の山間部に入って松平家の養子に入つたとされます。松平郷で力をつけ、知恵を磨き、戦国の乱世に大名家として登場してきます。原点の地、松平郷とは今のどの都市でしょうか？

- (1) 安城市                      (2) 岡崎市  
(3) 豊田市                      (4) 碧南市

## 解説

松平初代 親氏については様々な伝承があり、謎の多い存在です。一般的には豊田市の松平郷に入り、在地領主であった松平太郎左衛門家の婿養子になって家康公に繋がる松平家を興したとされています。松平郷の領主となった親氏は、松平郷敷城を築き、弟とされる泰親と協力して「中山七名」と呼ばれる額田山中の領主たちを従え、勢力を拡大して戦国大名 松平氏の基礎を築きました。ただ、「松平氏由緒書」の記述から、実際には買得によって土地を獲得したとする説もあります。



松平親氏像(豊田市松平町)

## 問題24

家康公先祖の松平氏 初代 親氏が名乗っていたという時宗の法名はなんでしょうか？

- (1) 観阿弥                      (2) 世阿弥  
(3) 天阿弥                      (4) 徳阿弥

## 解説

親氏は父 有親と共に関東で鎌倉公方に味方して敗れ(あるいは信濃国浪合村で斯波氏の軍勢に敗れたとする説もある)、幕府の追捕を避けるために父とともに相模国の時宗総本山清浄光寺(遊行寺)に入って出家、徳阿弥と称して諸国を行脚しました。同じ時宗の寺院である三河国大浜(碧南市)の称名寺や矢作の光明寺にその足跡が残されています。



松平親氏位牌(光明寺蔵/岡崎市)

## 問題25

親氏は、徳川家の正式な系譜では、源氏のどの氏族の出自になっているのでしょうか？

- (1) 足利氏 (2) 佐々木氏  
(3) 土岐氏 (4) 新田氏

## 問題26

松平初代 親氏のころから仕えていたと伝わる家臣団筆頭の家はどこでしょうか？

- (1) 安藤氏 (2) 井伊氏  
(3) 酒井氏 (4) 水野氏

## 解説

『東照宮御実紀』『系図纂要』には、親氏は新田莊得川に居住し、得川を称した義季の子孫にあたり、得川親季の孫、有親の子とされています。足利市にある「鏝阿寺系図」には、親氏の祖父親季が新田義貞の孫にあたり、得川義季の子孫である世良田政義の養子となって、世良田得川氏を継いだと記されています。いずれにしろ、徳川幕府の時代に編纂されたものであるためにその真偽が問われていますが、家康公の祖父である清康も「世良田」姓を名乗っていたことから、松平家に代々伝えられた系譜とも考えられます。



世良田東照宮(群馬県太田市)

## 解説

酒井氏の出自については、松平初代 親氏と同様、いくつかの伝承があります。酒井家の家譜によれば、もともと三河国碧海郡酒井郷あるいは同国幡豆郡坂井郷の在地領主であったとされていますが、松平氏由緒書によれば岡崎市北部(同国額田郡)の在地領主であった様子が記されています。これは酒井家初代 広親誕生の経緯を記した内容の違いがその原因となっています。ただ、酒井広親はいずれの説にしろ親氏の子または甥ということになり、最も古くからの同族の譜代家臣であることに違いはないでしょう。



酒井広親石宝塔(市文化財/岡崎市)

## 問題27

松平三代 のぶみつ 信光は、おじ 叔父の二代 やすちか 泰親とともに、山間部の松平郷から平野部の矢作川流域に進出し、拠点となる城をつくりました。なんという城でしょうか？

- (1) 安城城 いわづじょう (2) 岩津城  
 (3) 上野城 うえのじょう (4) 岡崎城

## 解説

松平三代 信光は松平氏西三河進出のキーマンと考えるとよいでしょう。応永28年(1421)、二代目で叔父にあたる泰親と共に三河国岩津の中根大膳を討ち、本城となる岩津城とその周囲に七つの砦とりでを築きました。岩津城の本丸は南側に土塁とらいを築いてその中央に虎口からぼり(出入口)を設け、空堀くわに土橋どばしを設けて南側の馬出うま(虎口の外側に曲輪まがわを築いて防御力を高めた形)へと通じています。本丸の北側にも平たく削った場所が残っており、中世の古城として保存状態も良好です。(市指定史跡)



岩津城址土橋跡(市史跡/岡崎市)

## 問題28

松平氏が三河で勢力を伸ばしてゆくことができた一つの理由に、三代 信光が室町幕府政所執事の被官ひかん(家臣)となり、額田郡牢人一揆ろうにんいっきを鎮圧したことがあります。信光が仕えた室町幕府政所執事とは誰でしょうか？

- (1) 伊勢貞親 いせさだちか (2) 上杉憲政 うえすぎのりまさ  
 (3) 細川勝元 かづもと (4) 山名宗全 やまな そうぜん

## 解説

松平信光が勢力を伸ばすことができたのは、幕府政所執事の伊勢貞親と主従関係にあったからです。寛正6年(1465)に額田郡牢人(丸山・大庭・尾尻・高力・芦谷などの奉公衆や足利一族被官)が井ノ口砦とりで(岡崎市)で起した一揆を伊勢氏の命で鎮圧し、その所領を与えられました。さらに応仁・文明の乱中には安城・岡崎の城も攻略し、領地の拡大と共に一族庶子を各地に分立、松平氏発展の基礎を固めたのです。



井ノ口砦跡(井ノ口稲荷社/岡崎市)

## 問題29

寛正6年(1465)、松平信光は三河守護から額田郡牢人一揆の鎮圧を命じられて功をあげますが、このとき松平氏とともに鎮圧を命じられた三河の領主で、恩賞で東三河の渥美郡田原の地を得て、渥美半島進出のきっかけとなったのは誰だったでしょうか？

- (1) 中条氏  
(2) 戸田氏  
(3) 本多氏  
(4) 水野氏

## 解説

戸田氏も松平信光と同様、幕府政所執事伊勢氏被官の在地領主であったとされています。当主であった戸田宗光は信光と縁戚関係も結んでおり、額田郡牢人一揆の鎮圧では武功を挙げました。彼は文安年間(1444年～1449年)、代官を務める碧海郡上野(豊田市上郷)に上野城を築城したと伝えられています。文明7年(1475)には三河国渥美郡大津村に進出しました。そして文明11年(1479)には一揆を起こした一色氏を追って田原に進出し、渥美半島全域を支配する契機としました。



田原城復元桜門(田原市)

解答… (2)

## 問題30

信光は額田郡牢人一揆鎮圧の恩賞で西郡竹谷(蒲郡市竹谷町)の地を得、長男の守家が入り竹谷松平家の祖となります。その家紋は、なぜか新田氏と同種で、これが現在の蒲郡市の市章となっていますがどれでしょうか？

- (1) 丸に一つ引き (2) 丸に二つ引き (3) 千切紋 (4) 宝珠を掴む龍の三本爪



## 解説

信光の西三河支配の起点となったのは、額田郡牢人一揆の鎮圧後に恩賞で得た地に一族の庶子を分立させたことでした。居城であった岩津を除くと、最も早くに一族を置いたのは竹谷(蒲郡市)です。次には形原、五井という順で、いずれも現在の蒲郡市域の海沿いの地に一族を配したことになります。竹谷松平氏は「丸に一つ引き」の家紋。「愛知百科事典」には市章について「徳川の親系、蒲郡殿様松平家の家紋である「丸に一の字」を図案化した」と記録されています。



竹谷松平氏大手門(蒲郡市博物館)

解答… (1)

## 問題31

松平四代 親忠<sup>ちかただ</sup>は、一族の菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>として大樹寺<sup>おおいじゆ</sup>を創建<sup>そうけん</sup>しました。「大樹」とは、中国の言葉で何を意味する言葉でしょうか？

- (1) 一族の繁栄<sup>はんえい</sup> (2) 皇帝<sup>こうてい</sup>  
 (3) 将軍<sup>しょうぐん</sup> (4) 平和

## 解説

文明7年(1475)、安城松平家当主 親忠<sup>ちかただ</sup>が戦死者を供養<sup>くよう</sup>するため、勢誉愚底上人<sup>せいよぐていしやうにん</sup>の開山により大樹寺が創建されたと伝えられます。ただし寺の開山式定によれば、戦死者供養の内容はなく、松平一族の菩提寺として創建されたというのが正しいでしょう。「大樹」とは征夷大将軍の唐名<sup>からな</sup>(中国の官職名)であり、松平氏から将軍が誕生することを祈願して、勢誉愚底により命名されたと伝わるもので、他には見られない寺名です。



勢誉愚底上人像  
(大樹寺蔵／岡崎市)

解答… (3)

## 問題32

四代 親忠<sup>ちかただ</sup>の時代に、松平家の戦勝祈願所<sup>せんしょうきがんじよ</sup>として建立され、一族の氏神<sup>うじがみ</sup>となった神社はどこでしょうか？

- (1) 伊賀八幡宮 (2) 岩津天満宮  
 (3) 六所神社 (4) 若宮八幡宮

## 解説

伊賀八幡宮は、文明2年(1470)松平親忠により一族の戦勝祈願所として創建されました。以後、松平家代々の信仰を受け、家康公も慶長16年(1611)に社殿の造営を行ったことが現存する「棟札」に示されています。現存する社殿は、寛永11年(1634)に三代将軍 家光が上洛する際、徳川家ゆかりの神社として改築を命じ、2年後に完成したものです。その時に東照公を合祀しました。



伊賀八幡宮社殿(国重文／岡崎市)

解答… (1)

**問題33**

松平五代 長親ながちかの時代だいに三河は駿河の今川氏の大規模な侵入を受けます。長親らの活躍かつやくでなんとか追い返しますが、岩津松平家いわたげきは大打撃を受けています。このとき、今川軍を率いていたのは誰だったのでしょうか？

- (1) 井伊直平いのおひら (2) 伊勢盛時もりとき(後の北条早雲)  
 (3) 今川氏親うじちか (4) 太原雪斎ひき

**解説**

永正3年(1506)、大軍で東三河を制した今川軍は西三河に進攻し岩津城を攻め落とします。松平五代 長親は自ら500ばかりの手勢を率いて安城城を出陣、1万余という今川の大軍に対し井田野(岡崎市井田町周辺)で合戦に及びました。松平勢の決死の戦いぶりに今川方は劣勢に立たされ、最後は今川軍を率いる大将 伊勢盛時の旗本勢まで打ち崩されました。一方、岩津松平家は衰退し、長親の安城松平家が代わって宗家そうけになったものと考えられます。

※三河遠征軍を率いていたのは伊勢盛時ですが、侵攻を命じた今川の当主は氏親であるため、(3)も正解とします。



北条早雲像  
(複製/小田原城博物館蔵)

**問題34**

四代 親忠そうけ以来、松平宗家ほんきよの本拠は安城城となりますが、松平七代 清康きよやすが攻め落とし、岡崎に進出する切っかけとなった城はどれでしょうか？

- (1) 井田城 (2) 岩津城やまなかじょう  
 (3) 西尾城 (4) 山中城

**解説**

松平七代 清康は永正8年(1511)、六代 信忠のぶただの嫡男ちやくなんとして生まれました。大永3年(1523)に隠居した父に代わり13歳で当主となります。当初は清孝いんきよと名乗っていました。翌年には山中城(岡崎市)を攻撃して岡崎城主の西郷信貞を屈服させ、さらには足助城あすけじょうの鈴木重政を攻めてこれを降伏させました。大永7年(1527)、清康が信貞の居城であった明大寺の旧岡崎城に居城を移していた様子そうが「宗長紀行」に記されています。そしてさらに3年後には現在地の岡崎城に移転し、松平宗家の拠点としました。



三河山山中城縄張り図(岡崎市)

## 問題35

松平七代 清康の岡崎城進出で功績をあげ、市の「<sup>ますとり</sup>「<sup>けんり</sup>「<sup>けんり</sup>」の権利(商売の税金を徴収する権利)を与えられると、税を免除して諸国から商人を集め、松平家の新しい城下町の発展を<sup>ほか</sup>図った家臣は誰でしょうか？

- (1) 大岡忠勝 <sup>おおおかただかつ</sup>  
 (2) 大久保忠茂 <sup>おおくほただしげ</sup>  
 (3) 奥平貞勝 <sup>おくひらさだかつ</sup>  
 (4) 西郷頼嗣 <sup>さいごうよりつぐ</sup>

## 解説

大久保忠茂は文明8年(1476)生まれ。松平清康に仕えました。西郷信貞の拠点である山中城を攻め落とす時に功を挙げ、清康が岡崎に進出する道を開いたとされています。大久保氏は元々は「宇都宮氏」を名乗る新田氏の庶流で、古くから松平氏に仕えますが、この忠茂の時より大久保姓に改めたと伝わります。忠茂は賞されて升取り(市場の管理者)に任じられ、岡崎城下町「開市」の立役者となりました。



岡崎開市の地「連尺通り」(岡崎市)

解答… (2)

## 問題36

清康は、模外和尚を<sup>もがいおしょう</sup>開山、酒井正親を<sup>まさちか</sup>大檀那とし、<sup>ぜ</sup>「<sup>じでら</sup>「<sup>じでら</sup>」と呼ばれる寺院を建立しましたが、<sup>せきがほら</sup>「<sup>うたのかみけ</sup>「<sup>うたのかみけ</sup>」の関ヶ原の合戦後に酒井家(雅楽頭家)が<sup>まえはしはんしゅ</sup>前橋藩主になると「是の字寺」も前橋(群馬県前橋市)に新たに建立されました。現在も<sup>れきだい</sup>歴代藩主の<sup>れいびょう</sup>霊廟が並ぶこの寺院の正式名称はなんでしょうか？

- (1) 甲山寺 <sup>こうざんじ</sup>  
 (2) 松應寺 <sup>しょうおうじ</sup>  
 (3) 浄珠院 <sup>じょうじゆいん</sup>  
 (4) 龍海院 <sup>りゅうかいいん</sup>

## 解説

享禄3年(1530)、20歳の松平清康は左手に「是の字」を握る夢を見ました。この意味を<sup>りゅうけいいん</sup>龍溪院(岡崎市桑原町)の模外和尚に問うと、「これは吉兆、『是の字』を握るは天下をとることなり」と答えたと伝わります。「是」を分解すると「日下人」と読めると解釈したのです。喜んだ清康は模外のために城下に龍海院を建立しました。後に前橋に移りますが、岡崎の寺も復興されます。岡崎の山号は「満珠山」、前橋は「大珠山」。いずれも「是の字寺」です。



酒井家廟所(龍海院/群馬県前橋市)

解答… (4)

## 問題37

天文4年(1535年)、清康が「森山崩れ」で25歳で急死すると、叔父の松平信定が岡崎城を占拠し、10歳の嫡男 広忠は阿部定吉とともに岡崎を脱出します。広忠が岡崎城へ帰還するために頼った大名は誰だったでしょうか？

- (1) 足利義輝 (2) 今川義元  
(3) 上杉謙信 (4) 織田信秀

## 問題38

応仁の乱(1467)以後、足利将軍家の権威は失墜し、家臣が主家にとって代わる「下剋上」の風潮が生まれ、秩序なく土地の収奪が繰り返される時代となりました。この時代に生まれてきた新興の大名のことを何と呼ぶでしょうか？

- (1) 近世大名 (2) 守護大名  
(3) 戦国大名 (4) 婆沙羅大名

## 解説

天文4年(1535)松平清康が死去しますが、その時、嫡子の広忠は10歳の少年でした。大叔父にあたる桜井松平信定は岡崎城に入り、強い権限を持って広忠殺害を企てるようになったと伝えられます。松平宗家嫡流の危機を悟った重臣の阿部定吉は、広忠を伴って岡崎城を脱出。伊勢国神戸、遠江国掛塚、駿河国と流浪しました。この時、駿河の太守今川義元が広忠の後ろ盾になり、大久保忠俊をはじめとする「五人衆」の企ても功を奏して岡崎城に帰還できたと伝えられます。



今川義元木像(臨濟寺蔵/静岡市)

## 解説

足利将軍家のもとでは守護大名が正式に認められた大名でした。ところが将軍の権威が失墜するようになると、各地で地頭や土豪たちによる土地の収奪が行われるようになり、一国を支配するような者まで現れます。美濃国の斎藤道三や相模国の北条早雲などはその典型であり、一国支配の実力と先祖の出自が源氏・平氏・藤原氏・橘氏のいずれかであれば朝廷から叙任され、大名として認められるようになりました。これらの新興大名を特に戦国大名と呼んでいます。



斎藤道三像(常在寺蔵/岐阜市)

## 問題39

家康公が誕生したとき、次の4人の中で、20歳を超えていた最年長者は誰でしょうか？

- (1) 上杉謙信 (2) 織田信長  
(3) 武田信玄 (4) 豊臣秀吉

## 解説

戦国時代後半から終盤にかけて活躍する武将たちです。彼らと家康公の関係を知る上でその年齢差を意識しておくことも大切なことです。家康公生誕の頃は乱世の真っ只中でありながら、優秀なリーダーたちが少しずつ安定した時代への転換を試みる、そんな機運が醸成されてきました。各地の武士や大名たちが次第に淘汰され、生き残りをかけた駆け引きや合戦が行われていました。家康公はそのような武将たちに囲まれ、自己研鑽を怠ることなく生き延びていくのです。



武田信玄像(甲府市)

## 問題40

天文11年(1542)12月26日、松平家九代目当主となる徳川家康公誕生。そのときの様子が描かれている「東照社縁起絵巻」の中で、重臣のひとりが暮目の矢(魔除けの矢)を引き、もうひとりの重臣が胞刀を抱えています。このふたりの重臣とは誰と誰でしょうか？

- (1) 阿部定吉と松平信定  
(2) 石川清兼と酒井正親  
(3) 大久保忠茂と本多忠高  
(4) 鳥居忠吉と林 忠満

## 解説

東照社縁起絵巻は家光の時代に描かれたものですが、家康公の生涯が生き活きと描かれています。「生誕」の場面では、岡崎城二の丸坂谷邸で男の赤ちゃんを乳母から大切に受け取る父の広忠、次の間で女官たちと過ごす母於大の方などが描かれ、部屋の外の縁では、魔除けの儀式として暮目の矢を放つ重臣の石川清兼、胞刀を大切に抱える酒井正親の姿が描かれます。この二人が当時の松平宗家を支える重臣であったことが窺えます。



暮目の矢実演(家康公生誕祭/岡崎市)

## 問題41

誕生した家康公には、松平家(安城松平家)、<sup>のち</sup>後には徳川将軍家の嫡男を示す<sup>ようみょう</sup>幼名が付けられました。何という名前でしょうか？

- (1) 牛若<sup>うしわか</sup> (2) 竹千代<sup>たけちよ</sup>  
 (3) 寅松<sup>とらまつ</sup> (4) 龍丸<sup>りゅうおうまる</sup>

## 解説

松平宗家では、五代目の長親の時から<sup>せ</sup>世子の幼名に「竹千代」と命名していたようです。家康公の父 広忠も、一般的に使われる「千松丸」の他に竹千代と記される史料も存在します。また家康公の長男 信康も竹千代でしたが、自決をいたしましたので、<sup>あと</sup>跡を継いだ三男の秀忠が幼名 竹千代を名乗りました。徳川将軍家では家康公を含めると8名が幼名に竹千代を名乗っています。



竹千代石像(岡崎市)

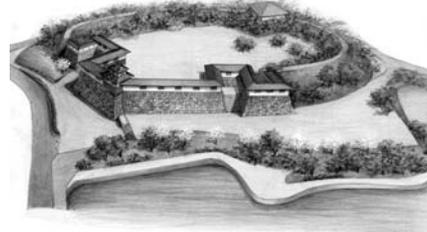
## 問題42

天文13年(1544)、松平家と同じく今川方だった母・<sup>おだい</sup>於大の<sup>じつ</sup>実家<sup>か</sup> 水野家が<sup>みずの</sup>織田方に<sup>ねがえ</sup>寝返ったため、戦国の<sup>なり</sup>倅<sup>べつ</sup>といはいえ、<sup>おわり</sup>於大は<sup>りべつ</sup>離縁され、<sup>りえん</sup>幼い家康公は母と<sup>はざま</sup>離別します。<sup>えにし</sup>尾張と<sup>えんぐみ</sup>駿府の<sup>もと</sup>狭間の三河の水野・松平両家。その<sup>きず</sup>縁が家康公を生み、戦国を<sup>しず</sup>鎮め、<sup>きず</sup>江戸の<sup>もと</sup>泰平を築く<sup>もと</sup>基になったとすれば、日本最良の<sup>えんぐみ</sup>縁組であったともいえます。実家、水野家は現在のどの都市にあったでしょうか？

- (1) 蒲郡市<sup>かり</sup> (2) 刈谷市<sup>やし</sup>  
 (3) 名古屋市<sup>はん</sup> (4) 半田市<sup>だし</sup>

## 解説

水野家は松平家と同じく<sup>はさ</sup>織田氏の勢力と今川氏の勢力に<sup>はさ</sup>挟まれた地域を所領としていました。それが現在の刈谷市域に当たります。於大の方の父 水野<sup>ただまさ</sup>忠政は独立を守り、織田氏や今川氏に<sup>じゅうぞく</sup>従属することを<sup>きら</sup>嫌っていました。岡崎の松平氏にとって<sup>こんいん</sup>婚姻関係を結んでおくことは、西三河に進出を強める織田家をけん制することになったのでしょう。



刈谷城復元イメージ(刈谷市)

**問題43**

家康公は、6歳さいから19歳までの少年期から青年期にかけて人質に出されました。8歳から19歳までは駿府の今川氏のもとで人質ひとじちとして過すごしましたが、6歳から8歳までは誰のもとで人質生活を送ったのでしょうか？

- (1) 上杉氏                      (2) 織田氏  
(3) 戸田氏                      (4) 水野氏

**解説**

家康公が駿府に人質に出されたのは、織田氏の西三河進出に対し今川義元の援軍を得るためでした。6歳の時です。途中、田原の戸田康光によって尾張に送られてしまいましたが、父広忠は恭順を求める織田方の使者に対し、毅然とした態度で断ったと伝えられます。この話を聞いた義元は人質なしで援軍を送りますが、譜代の家臣たちは家康公の奪還だつかんに向けて奮ふるい立ちました。広忠のこのような姿勢が松平家を救ったのだと評価されています。



人質交換の地碑(笠寺観音／名古屋市)

**問題44**

駿府での人質時代、幼い家康公の近くに住み、元服するまで養育よういくにあたった女性けんは誰でしょうか？

- (1) 於大(伝通院)                      (2) 於久(随念院)  
(3) 源応尼(華陽院)                      (4) 寧々(高台院)

**解説**

源応尼はもともと刈谷の水野忠政の妻でしたが、松平清康に請われて岡崎城に嫁ぎました。清康の死後は岡崎城を出て他家に嫁ぎます。年齢については全くの不明で、詳しいことは分かっていません。ただ、家康公の母 於大の方の実母であり、今川義元の要請で駿府の家康公の養育にあたったとも伝えられます。智源院という寺で読み書きを教え、家康公の成長を見守りました。家康公は後に智源院を源応尼の法名である華陽院と改め、丁重ちやうじゆうに葬ったと伝えられます。



華陽院の墓(華陽院／静岡市)

**問題45**

家康公は駿府での人質時代に、今川家の重臣である太原雪斎から儒教や兵法の教育を受けていたとも伝わります。家康公手習いの間が今も残る、雪斎が住持を務めた寺院は、清見寺とどこでしょうか？

- |         |         |
|---------|---------|
| (1) 寛永寺 | (2) 法蔵寺 |
| (3) 龍潭寺 | (4) 臨濟寺 |

**解説**

太原雪斎はもともと駿河の武将の子でしたが(庵原氏)、幼いころから京都五山の建仁寺で修業を行い、臨濟宗の僧として非常に優秀な人材であったと伝えられます。今川家に請われて義元の教育や政治や軍事の補佐を行ってきました。義元は幼い家康公の学問の師としても雪斎を任じており、家康公を大切に考えていた様子が窺えます。雪斎は今川家と関係の深い臨濟寺の二代目住持であり、ここで家康公の教育にあたったと伝えられ、その時の「手習いの間」が復元されています。



臨濟寺(静岡市)

解答… (4)

**問題46**

永祿3年(1560)、今川義元が織田信長と桶狭間で戦い無念の最期を遂げた際、大高城で義元の到着を待っていた家康公は岡崎のある場所まで退却しました。それはどこでしょうか？

- |           |         |
|-----------|---------|
| (1) 伊賀八幡宮 | (2) 松應寺 |
| (3) 大樹寺   | (4) 法蔵寺 |

**解説**

大高城を脱した家康公は、岡崎城に入ろうとはしませんでした。城には今川方の將兵が残っていたからです。主が討たれたのに逃げ帰ったと非難されることを避けたのでしょうか。家康公一行は菩提寺である大樹寺に逃げ込んだのでした。その時には30名ほどの家臣しか従えていなかったと伝えられます。数日を経て岡崎城から今川の兵が退却したとの報を受け、「捨てた城なら拾おうではないか」と堂々と入場したと伝えられます(三河物語)。



大樹寺三門(県重文/岡崎市)

解答… (3)

## 問題47

前問の場所まで辿り着いた家康公でしたが、追手に囲まれてしまい、先祖の墓前で自決の覚悟をします。その時、住職であった登誉上人より与えられ、平和思想の原点となった言葉は次のどれでしょう？

- (1) 厭離穢土 欣求浄土 (2) 大一大万大吉  
(3) 毘 (4) 非理法権天

## 解説

大樹寺に逃げ帰った家康公でしたが、織田方の雑兵数百に囲まれてしまいました。先祖の墓前で自決を決意した家康公に、登誉上人が生きて戦う意味を諭し与えた言葉が「厭離穢土、欣求浄土」です。戦乱の世に戦う意味は「穢れたこの世を厭い離れ、欣こんで浄土の世界を求める」ためだと諭したのです。これは源信の著した「往生要集」上下巻の題名でもあるのですが、家康公は平和な社会を実現する意思を示す言葉としてこれを旗印とし、戦の時は常に本陣に掲げたのです。



松平八代の墓(大樹寺/岡崎市)

## 問題48

家康公が岡崎城主として自立を果たそうとした時に、もっとも大きな力となったのが尾張の織田信長との同盟です。この同盟が結ばれた場所といわれるのはどこでしょうか？

- (1) 岡崎城 (2) 清洲城  
(3) 小牧城 (4) 名古屋城

## 解説

織田信長との軍事同盟は信長の居城であった清洲城で行われました。これは信長が家康公に敬意を表したからで、この時の様子を記した諸記録では、信長が家康公に気を遣っていた様子が伝わってきます。清洲城下に入った家康公一行を物珍しそうに見物していた織田の家臣に、先頭に行く本多忠勝が「無礼である」と一喝した話。家臣たちは急いでひれ伏したと記されています。また家康公の護衛をしていた植村家存が刀を持って書院に入ろうとした際、織田の家臣から咎められたのを一蹴したという逸話などが遺されています。



清洲城発掘石垣(清須市)

## 問題49

家康公と織田信長の間で結ばれた同盟は、どのような内容だったのでしょうか？

- (1) 織田信長に家康公が従う
- (2) 家康公に織田信長が従う
- (3) 対等の立場で互いに協力し合う
- (4) 2年間という期限付の不可侵条約

## 解説

清洲同盟について、家康公が信長への従属を認めたものと考えるのは短絡的です。

同盟の内容は互いの主権を尊重するものであり、対等な内容であったと考えられます。江戸時代の史料によれば、(信長・家康の)どちらかが「天下の首将となった時にはその麾下に属す」と明記されたと伝わります(武徳編年集成)。この同盟は戦国の世では大変珍しく、信長の死まで一度も破られることはありませんでした。愛知から三英傑が誕生したのは、この同盟があったからです。



織田信長像(清洲城址/清須市)

## 問題50

家康公が三河を統一する過程で起きた危機「三河一向一揆」において、一族が団結して家康公の味方をし、上和田城など最前線で活躍。和睦の際、一族の長老の進言により、一揆方に味方した多くの家臣が許されたことから、その後、三河武士の鉄の結末が生まれたといわれます。江戸時代、大名となるこの譜代の家はどこでしょうか？

- (1) 大久保家
- (2) 夏目家
- (3) 蜂屋家
- (4) 渡辺家

## 解説

三河一向一揆では、一向宗門徒の家臣も多く、家康公にとっては譜代家臣団が二分するという大変な危機に見舞われたこととなります。その譜代家臣団の中で、大久保一族は法華宗を信奉する一族でした。したがって、家康公が浄土真宗からの改宗を命ずるまでもなく、家康側について戦ったのです。一族の中には大久保忠勝のように重傷を負う者もあらわれ、長老の忠俊はこの一揆を収めるよう家康公に強く進言したと記されます(三河物語)。



大久保一族の菩提寺長福寺(岡崎市)

## 問題51

本多一族はもともと一向宗信者であり、三河一向一揆の時には改宗して家康方につきますが、改宗せずに一揆方についていた人物はだれでしょうか？

- (1) 本多作左衛門重次 (2) 本多平八郎忠勝  
(3) 本多豊後守広孝 (4) 本多佐渡守正信

## 解説

本多家の中でも、忠勝のように家康公の側近として重用された武士は多いわけではありませんでした。したがって、すべての一族の武士が改宗したわけではありません。正信は本多一族の中でも宗家筋といわれた家の当主でしたが、弟と共に一揆側について戦いました。一説には、上野城(豊田市上郷)に籠って反家康の旗を挙げた酒井将監忠尚の与力として戦ったとも伝えられます。一揆後は三河から逃亡しますが、後に赦されて帰参し、晩年は家康公の懐刀として活躍しました。



本多正信像(加賀本多博物館蔵)

## 問題52

一向一揆を収め、三河を統一した家康公は、朝廷に正式に「三河守」を名乗ることを願い出て許されたことを機会に、初めて「徳川」を名乗りましたが、それは何歳の時でしょうか？

- (1) 19歳 (2) 25歳  
(3) 32歳 (4) 41歳

## 解説

家康公は東三河を平定し、全三河の支配権を確立した段階で朝廷に「従五位下三河守」の叙任を裁許されました。この時、姓を先祖が名乗っていた「徳川」に戻し、徳川三河守家康が誕生したのです。家康公25歳、大樹寺で自立を志してから6年目のことでした。ただしこの時は源姓ではなく藤原姓で認められています。名鉄東岡崎駅前に建立される家康公銅像は、この25歳の時をモチーフにしています。

家康公像  
(制作/神戸峰男 撮影/山崎兼慈)

## 問題53

東西三河を統一した家康公は、西三河の旗頭に石川家成(後に数正)を、東三河の旗頭に酒井忠次を置き三備の軍制を敷きました。酒井忠次が居城とし、東三河の新たな三河武士団を整えた吉田城は今この都市にあるでしょうか？

- (1) 新城市 (2) 田原市  
(3) 豊川市 (4) 豊橋市

## 解説

この時、酒井忠次に与えた判物(身分の上の者からの書状)が残されています。日付を見ると、「吉田東三河一円」を忠次に任せるといふもので、忠次に「東三河旗頭」として吉田城を与えることが記してあります。この新たな軍制は、一向一揆で家臣団が分裂したことを踏まえ、上からの命令系統をより明確にしたものだと言えます。松平一門衆も東西旗頭の下に置かれました。また家康公は直属の配下として旗本先手役を置き、機動力を持たせたのです。本多忠勝や榊原康政などが任じられました。



吉田城址(豊橋市)

## 問題54

三河一国を平定した家康公は、永禄11年(1568)遠江に攻め入り勢力拡大を目指します。その際に入った城で、後に「浜松城」と名付けられることになった城はどれでしょうか？

- (1) 井伊谷城 (2) 刑部城  
(3) 白須賀城 (4) 曳馬城

## 解説

遠江国に進出した家康公は、当初、居城の候補地として見付宿(磐田市)辺りを考えていたようですが、東西南北からの主要街道が交わる現在の浜松市中心部に居城を置くことを決めました。元々は曳馬城と呼ばれた城は遠江国の国人・飯尾氏の居城でしたが、家康公はここに入ったのです。ただ「曳馬」は「馬を引く」(退却する)という意味にも取れるということで、武将にとって縁起が良くないのではと考え「浜松」と改名したと伝わります。



曳馬城址(浜松東照宮／浜松市)

## 問題55

元亀元年(1570)、浜松の地に入った頃、家康公は同盟者の織田信長の求めに応じて近江国に出兵、姉川で戦い勝利します。このとき戦った相手は誰だったでしょうか？

- (1) 足利義昭 (2) 浅井・朝倉連合軍  
(3) 斎藤竜興 (4) 三好三人衆

## 解説

元亀元年(1570)4月に越前の朝倉義景に上洛要請をした信長は、それに応じない義景を攻めました。その時に妹・お市の方を嫁がせて縁戚関係を結んでいた浅井長政が朝倉方についたため、大変な窮地に陥ります(金ヶ崎の戦い)。いったん岐阜に引き上げた信長は、6月に再び兵を起し、家康公にも援軍要請をして姉川まで進出、浅井氏を攻めようとしていました。そこで起きたのが浅井・朝倉連合軍との戦い「姉川の合戦」です。この戦いの勝利により、信長は近江国支配を確立します。



姉川古戦場碑(滋賀県長浜市)

解答… (2)

## 問題56

元亀3年(1572)、遠江に侵入を始めた武田軍の進行具合を偵察しようとした家康公は、夥しい数の武田兵と遭遇してしまい、「一言坂の戦い」が起こります。そこで殿として活躍し、「家康に過ぎたるもの」として称えられた武将は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井忠次  
(3) 鳥居元忠 (4) 本多忠勝

## 解説

本多忠勝の有名な活躍譚ですね。三方ヶ原の合戦の前哨戦ともいわれる戦いですが、武田信玄の兵が家康本隊に襲い掛かろうとする危機を救った話です。「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭と本多平八」、天竜川を渡ってまんまと逃げられたことを悔しがった武田の武将が謳ったものとされています。江戸時代の軍記物には三河武士たちの勇敢な活躍がよく描かれますが、この三方ヶ原の戦いは戦国最強を謳われた武田信玄が相手であり、特に逸話が多く残されています。



一言坂古戦場碑(静岡県磐田市)

解答… (4)

## 問題57

領内を通過しようとする武田信玄に、家臣の諫言も聞かず三方ヶ原で挑み大敗した家康公は、浜松城に逃げ帰った後、自分への戒めのため、そのときの憔悴しきった自分の肖像画を描かせました。俗に、この絵をなんと呼ぶでしょうか？

- (1) 権現像 (2) しかみ像  
(3) 涅槃像 (4) 霊夢像

## 問題58

「三方ヶ原の合戦」では、圧倒的な兵力と武力を誇る武田軍に対し、浜松城での籠城戦をすすめる家臣の諫言を聞かぬ無理な出陣が災いし、大敗します。この時に家康公の身代りとなって落命した家臣は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠佐 (2) 夏目吉信  
(3) 蜂屋貞次 (4) 渡辺守綱

## 解説

この絵は正式には「三方ヶ原戦役画像」と呼ばれています。家康公が三方ヶ原の合戦において、家臣の進言に聞く耳を持たず、出陣を強行した結果多くの忠義の臣を失ってしまったことから、自分への戒めのために顔を顰め憔悴した表情を描かせたと伝わります。このことから『しかみ像』とも呼ばれていますが、その実際については様々な研究による説が存在しています。



しかみ像石像(岡崎公園)

## 解説

夏目吉信は六栗(幸田町)に知行地を持つ武将で、夏目家は清康の頃からの譜代家臣であったと伝わります。三河一向一揆の際には門徒側について家康公と戦い降伏しますが、最後は赦されました。三方ヶ原の合戦で、吉信は浜松城の留守居でしたが、敗色濃厚な状況に家康公の救援に向かいました。そして家康公を城に向けて逃がすと、自らが家康を名乗り敵中で討ち死にしたのです。浜松市では吉信の忠義を顕彰しようと、大正時代に「旌忠碑」が建立されています。



夏目吉信旌忠碑(浜松市)

## 問題59

三方ヶ原の合戦で敗れた後、浜松城を包圍しようとする武田軍に鉄砲で夜襲をかけ、一矢報いて徳川軍の強さを知らしめた武将は誰でしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 酒井忠次  
(3) 鳥居元忠 (4) 本多忠勝

## 解説

浜松城に逃げ帰った家康公でしたが、武田軍は追撃を止め、浜松城から程近い「犀ヶ崖」付近に野営をしました。一矢を報い武田の兵を退却させようと一計を案じた家康公は、崖に白い布を張り、大久保忠世に命じて夜半に崖の向こう側の武田軍の背後から鉄砲で夜襲をしかけたのです。狼狽した兵たちは、布を大きな橋と見間違えて、人馬もろとも谷底に転落しました。信玄は、「勝ちても怖き相手」と20歳年下の家康を評したと伝えられています。



犀ヶ崖古戦場(浜松市)

## 問題60

天正3年(1575)、三方ヶ原の合戦から3年後、病没した信玄の跡を継いだ武田勝頼の大軍に包圍された長篠城を決死の覚悟で抜け出し、岡崎城まで駆け抜けて家康公に城の危機を訴え、長篠城に戻る寸前で武田軍に捕まり、磔にされた忠勇の士は誰でしょうか？

- (1) 落合左平次 (2) 菅沼定盈  
(3) 鳥居強右衛門 (4) 服部半蔵

## 解説

武田の大軍に囲まれた長篠城でしたが、頑強に抵抗し、わずか五百余りの兵で一週間近くも陥落することはありませんでした。ところが兵糧蔵を焼失し城の命運も尽きるかと思われたその時に、岡崎城まで65kmの山道を駆け、城の状況を家康公に伝えたのが鳥居強右衛門勝商です。強右衛門はもともと奥平家の下級武士でしたが、この死をも恐れない忠義が後世の人々に感銘を与えたのです。



鳥居強右衛門磔死跡碑(新城市)

## 問題61

長篠城に救援に駆け付けた織田・徳川連合軍は、これまでの日本の戦の仕方を一変させるような新たな戦法で、武田の騎馬隊を壊滅させました。このとき、織田・徳川連合軍が新戦法に使用した武器とは何だったでしょうか？

- (1) 大筒 (2) 鉄砲  
(3) 長槍 (4) 弓矢

## 解説

長篠合戦屏風を見ると、馬防柵の前後で鉄砲を放つ武士たちの姿が描かれています。信長は三千丁とも伝わる大量の鉄砲で、武田の騎馬隊を撃ち崩しました。集団戦法の成果とされていますが、一方で酒井忠次が長篠城背後の鷲ヶ巣砦を奪い取ったことから、武田兵の退路を断ち、壊滅状態にまで追い込むことができたとも言われています。屏風絵をよく見ると馬防柵の前で戦う武士たちも見えます。大久保忠世・忠佐兄弟です。織田ではなく徳川の戦いであるということを強調したのです。



長篠合戦屏風(部分／犬山白帝文庫蔵)

## 問題62

天正7年(1579)、武田氏への内通の疑いをかけられた家康公の長男 信康は自害をすることになりました。その際、切腹の介錯を命じられながら実行できなかった武将は誰でしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 板倉勝重  
(3) 服部半蔵 (4) 平岩親吉

## 解説

「三河物語」によれば、家康公の嫡男 信康が遠江国二俣城で自刃に迫いやられたとき、服部半蔵正成が実検使(首実験をする役目)として遣わされ、切腹の介錯を命じられました。しかし半蔵は、「三代相恩の主に刃は向けられぬ」と言って涙を流し、介錯をすることが出来なかったと伝えられます。家康公は、「さすがの鬼も主君の子は斬れぬか」と半蔵をより一層評価したということです。後に関東に移った際、半蔵は自分の菩提寺として西念寺(新宿区)を開きましたが、信康の墓を建て菩提を弔ったということです。



信康の墓(西念寺／新宿区)

## 問題63

天正7年(1579)、家康公は織田信長の命により妻と嫡男を亡くします。徳川家存続のために自ら命を絶った嫡男 信康のために、家康公は二俣城(浜松市)近くに立派な墓を建てました。それはどこでしょうか？

- (1) 清瀧寺 (2) 龍潭寺  
(3) 西来院 (4) 天竜院

## 解説

信康事件の顛末は、様々な説が飛び交い、確かなことは分かっていません。近年では、妻の徳姫による父 信長への訴状が原因で、信長の怒りを買って切腹させられたという説は否定されつつあります。岡崎の信康と浜松の家康公の間で対立が生じ、結局、切腹に追いやられたという説も、三備の軍制の中に、信康の立ち位置がなかったことが家臣団の二重支配を引き起こした原因として考えられます。家康公は長男の死を悼み、二俣城に近い清瀧寺に立派な墓所を建てて吊ったのです。



信康廟(清瀧寺／浜松市)

解答… (1)

## 問題64

天正10年(1582)、本能寺の変で織田信長が明智光秀によって討たれた際、家康公は堺(大阪府)に滞在していましたが、事件の一報を受け急遽三河へ戻りました。いわゆる「伊賀越え」です。松平家忠が遺した「家忠日記」によれば、「伊賀越え」に何日掛かったのでしょうか？

- (1) 3日 (2) 7日  
(3) 10日 (4) 14日

## 解説

伊賀越えは「神君のご難儀」として捉えられ、徳川実記などでは7日間かかったことになっていますが、深溝松平家忠の「家忠日記」を見る限り足掛け3日間で岡崎に戻っていることが分かります。本能寺の変が起きた時、家康公一行は堺に逗留していました。とは言え、一泊したのみで、慌ただしく帰路に就いたことも理由がよく分かっていません。予め危機感を持っていたとすれば、伊賀越えも周到な準備の中で決行されたということになるのでしょうか。



御斎峠(伊賀上野市)

解答… (1)

## 問題65

明智光秀を討ち、発言権を強めた羽柴秀吉は、柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破ると、信長の後継者としての地位を更に固めて行きました。家康公はこれに危機感を持ち、信長の二男からの協力要請を受けて、小牧・長久手の合戦が起こります。家康公が協力支援した信長の二男の名前は何でしょうか？

- (1) 織田信雄 (2) 織田信包  
(3) 織田信孝 (4) 織田秀信

## 解説

織田信長には庶子(正室以外の女性から生まれた子)を含めて12名の男子がいたと伝わります。長男の信忠は父と共に本能寺の変に伴い、二条御所で死去してしまいました。跡継ぎを巡って二男の信雄、三男の信孝の間で確執が生じ、羽柴秀吉の謀略もあって信孝は死去します。自分の身に危険を感じた信雄は、家康公と結び秀吉に対抗しますが、小牧・長久手合戦の際に秀吉と単独で講和を結んだため、戦の大義を失った家康公は兵を撤退したのです。



織田信雄像  
(総見院蔵／京都市)

## 問題66

天正14年(1586)、天下人となった豊臣秀吉の妹・朝日姫を継室に迎え、秀吉に臣従した家康公は、この年、本拠を浜松城から移します。家康公の新たな本城となったのはどこでしょうか？

- (1) 掛川城 (2) 駿府城  
(3) 二条城 (4) 伏見城

## 解説

豊臣秀吉に臣従した家康公は、新たな五ヶ国(三河・遠江・駿河・甲斐・信濃)の領国経営に全力で取り組みます。そのために最前線となる地は、浜松ではなく駿府だと考えたのでしょうか。居城を駿府城に移し、北条氏との交渉や五ヶ国の総検地などを実行していきました。家康公は支配地を広げていく時には、常にその最前線に身を置いていたことが分かります。



駿府城巽櫓(復元／静岡市)

## 問題67

本能寺の変の後、<sup>かい</sup>甲斐・<sup>しなの</sup>信濃を領国とする五ヶ国大名となった家康公は、領民たちに対するきめ細かい政策によって、<sup>ごうそん</sup>郷村の<sup>しゅうあく</sup>掌握を成し遂げて行きますが、このために行った<sup>けんち</sup>検地をなんといいましょうか？

- (1) <sup>ご</sup>五ヶ国<sup>そんち</sup>総検地 (2) <sup>さんしゅうしき</sup>三州式<sup>けんち</sup>検地  
(3) <sup>たいこう</sup>太閤<sup>けんち</sup>検地 (4) <sup>なうけにん</sup>名請人<sup>けんち</sup>検地

## 問題68

天正18年(1590)、小田原攻めによる<sup>せ</sup>北条氏の<sup>ほうじゅうし</sup>滅亡後、<sup>めつぼう</sup>豊臣秀吉により<sup>かんとういほう</sup>関東移封を命ぜられた家康公。家康公が初めて江戸城に入った日を祝して、江戸時代、「八朔」と呼ばれる<sup>ぼくふ</sup>幕府の式典が毎年開かれましたが、それはいつでしょうか？

- (1) 8月1日 (2) 8月3日  
(3) 8月19日 (4) 8月31日

## 解説

検地そのものは全国の大名たちが古くから行ってきたことなのですが、秀吉の時代になり、<sup>ねんく</sup>年貢高をこれまでの<sup>かんだかせい</sup>貫高制(銭に換算して徴収する制度)から<sup>こくだかせい</sup>石高制に変えました。貫高が慣例に基づいた不正確なものだったからです。家康公はさらに詳細な<sup>さだめがき</sup>検地を行い、「七ヶ条の定書」によって耕作者たちの実情に合わせた年貢率を決めるようにしたのです。これにより農民たちへの無理な<sup>しゅうだつ</sup>収奪はなくなり、郷村は安定していきました。これを「五ヶ国総検地」と呼んでいます。



七ヶ条定書「福徳」朱印(磐田市)

## 解説

秀吉の命で家康公が関東に移され、江戸城に入った日が天正18年(1590)8月1日であったことから、「八朔」を祝うようになったと伝えられます。八朔というのは八月朔日、八月の初めの日という意味です。江戸市中では平和になったことをお祝いする祭りとして「八朔の祭り」が続けられ、大名・旗本などが<sup>かたびら</sup>白帷子で登城し将軍家に祝辞を述べたり、また、吉原では、遊女たちが<sup>しろむく</sup>白無垢の小袖を着て祝ったと伝わります。



新吉原仲之町八朔図(江戸名所図会)

## 問題69

関東移封により三河武士も関東一円に配置され、あらたな国づくりを始めました。その中で特に、江戸の町割りやインフラ整備に尽力し、現在の新宿の地名の由来にもなった人物は誰でしょうか？

- (1) 青山忠成 (2) 高力清長  
(3) 内藤清成 (4) 本多正信

## 解説

家康公は江戸の地に入った際、城の普請より町づくりを優先させ、内藤清成や青山忠成を江戸町奉行に任じて町割りなどを命じます。内藤清成は市中検分の際、家康公より四谷から代々木村にかけての広大な屋敷地を与えられました。この土地は後に新しい宿場開設のため利用されましたが(内藤新宿)、明治維新まで内藤家の江戸藩邸として使用されます(現在の新宿御苑周辺)。清成は関東総奉行・江戸町奉行・老中などを歴任、青山忠成と共に、幕府初期の治世を支えました。



内藤新宿復元模型(新宿歴史博物館蔵)

## 問題70

家康公は関東移封に伴い、関東の要地に重臣を配置しました。組み合わせとして間違っているものはどれでしょうか？

- (1) 井伊直政 — 上野国箕輪  
(2) 大久保忠世 — 下総国矢作  
(3) 榊原康政 — 上野国館林  
(4) 本多忠勝 — 下総国大多喜

## 解説

関東移封時の大名配置では、高禄の重臣は関東に入る街道の要衝に、小禄の大名や旗本は江戸城に近い地に配置して江戸を守らせました。東海道の関東入り口にあたる小田原には大久保忠世を4万石で配し、箱根を守らせました。また江戸との交通の要所であり、香取神宮の遷座する下総矢作にはやはり4万石で鳥居元忠を配しています。



小田原城復興天守(小田原市)

## 問題71

家康公は、戦乱の無秩序な時代を繰り返さないために新しい武士の姿が必要と考え、学問を重視しました。特に秀吉が朝鮮出兵を強行している間に学んだとされる、人の道の正義を強く求める学問とは何でしょうか？

- |          |         |
|----------|---------|
| (1) 古文辞学 | (2) 朱子学 |
| (3) 陽明学  | (4) 蘭学  |

## 解説

江戸末期に編纂された「家康公教訓録」の中の「井上正就覚書」に次のような一節があります。「武道の神髄は得易すからず…武道の要は無道を討つにあり、善を正し、悪を滅し、民を恵み、人を欺かず、食を奢らず、慾を求めず、治国なりとて漫りに咎なき他国を討ち、戦を挑むは、無用の事也」—武士は損得で動くのではなく、非道なるもの討つこと。自分をきちんと治めることが大切であると述べています。これは朱子学の哲学でもあり、新しい武士の姿として求められた内容です。



藤原惺窩像(兵庫県三木市)

## 問題72

秀吉が死去して2年後の慶長5年(1600)、豊臣政権の大老筆頭の家康公を排除しようと、上杉景勝らと手を組み、家康公の上杉征伐(会津出兵)に合わせ武力蜂起した部将は誰でしょうか？

- |          |          |
|----------|----------|
| (1) 石田三成 | (2) 加藤清正 |
| (3) 福島正則 | (4) 前田利長 |

## 解説

天下分け目の合戦と知られる「関ヶ原の合戦」は、豊臣政権内の徳川排除の動きから起きたものです。朝鮮出兵後の豊臣家臣たちの内部分裂が起き、加藤清正や福島正則らを中心とする武断派家臣と、石田三成を中心とする吏僚派家臣の対立が激化します。家康公は武断派の部将たちから頼られ、関ヶ原の合戦の構図が出来上がりました。五名いた大老の内、上杉景勝を始めとして全員が石田方に与し、家康公が排除されようとしたのです。



石田三成像(龍潭寺/滋賀県彦根市)

**問題73**

駿府での人質時代より家康公に小姓として仕えて苦楽を共にし、関ヶ原の戦い直前に伏見城を守り戦死した三河武士は誰でしょうか？

- (1) 石川数正                      (2) 酒井忠次  
(3) 鳥居元忠                      (4) 平岩親吉

**解説**

「三河武士の鑑」と称された鳥居元忠は、家康公より3歳年長でしたが、人質時代は年齢の近い側近として共に学んだ主従関係でした。元忠は父の忠吉から「二心を持たない」忠義心を学び、家康公の傍を離れることなく苦楽を共にします。関ヶ原の前哨戦でもある伏見城の攻防では、僅かな城兵で数万の西軍を相手に、最後まで戦い抜いて討ち死にを遂げました。元忠の死は東軍の諸将にも伝わり、皆が奮い立ったといえます。



鳥居元忠所用兜(精忠神社蔵/栃木県壬生町)

**問題74**

慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦は、会津の上杉征伐に向かう途中で開かれた「○○評定(会議)」で家康公に味方した豊臣大名を中心に展開します。この評定が行われたのは、現在の栃木県のどの都市でしょうか？

- (1) 足利市                      (2) 宇都宮市  
(3) 小山市                      (4) 日光市

**解説**

この評定が行われた小山市は、「徳川幕府三百年の道筋を付けた開運の地」として、この歴史的なできごとを顕彰しています。会津の上杉討伐を目前にして、伏見での西軍拳兵の報を受けた家康公は、特に豊臣系の武将たちを集め、徳川方に与するか、石田方に与するか自由に選択をさせました。彼らの妻たちが大坂城に人質として捕らえられていたからです。福島正則を中心とする武将たちのほとんどが徳川に味方することを決意、ここで反転して西に向かうことになるのです。



小山評定跡碑(栃木県小山市)

**問題75**

豊臣大名を出し抜き、井伊直政とともに関ヶ原の合戦の口火を切った家康公の息子は誰でしょうか？

- (1) 長男 岡崎信康  
 (2) 二男 ゆう き ひでやす 結城秀康  
 (3) 三男 徳川秀忠 ひでただ  
 (4) 四男 松平忠吉 ただよし

**解説**

関ヶ原の合戦は豊臣方の武将たちによる戦いの様相を呈しました。西軍の実質的な現場指揮は石田三成が担っていました。三成を嫌う福島正則は最前線に陣を構え、自らが一番槍をと意気込んでいましたが、家康公の四男 忠吉の義父でもある井伊直政は、忠吉を伴い福島隊の前面に出ます。そこで最初の鉄砲を射かけると関の声を挙げて攻め込んだと伝わります。功を狙っていた福島正則は怒りますが、戦後の評定では徳川が口火を切ったことに喜ぶ家康公を前に黙していたと伝わります。



忠吉病平癒祈願富部神社(国重文／名古屋市)

解答… (4)

**問題76**

関ヶ原合戦に勝利した家康公は、松平一門や譜代の家臣たちを、領地の関東だけでなく他の地域にも配置しました。彼らは主にどの地域に配置されたのでしょうか？

- (1) 遠隔地の東北や九州地域 えんかくち  
 (2) 関東から東海にかけての中央地域  
 (3) 大坂城周辺の関西地域  
 (4) 東北から九州までの全国各地

**解説**

関ヶ原合戦後の大名仕置き(賞罰)では、井伊直政を中心にして本多忠勝、榊原康政がその知行地を決定したと伝わります。関ヶ原合戦から徳川に与した武将たちは「外様」として遠隔地に置かれ、それ以前から家臣となっていた「譜代」は、江戸を中心として主に関東、東海地域の近接地に置かれました。遠隔地の外様には高禄を宛て、関ヶ原の合戦で主を失った浪人たちの再雇用を促したのです。松平一門衆や譜代衆たちは江戸を守ることを優先させたと考えられます。



開国の元勳井伊直政像(彦根市)

解答… (2)

## 問題77

家康公が江戸に幕府を開くまでに多くの施策が実行されましたが、次の中で間違っているものはどれでしょうか？

- (1) 流通の重要性を考え、伝馬制を取り入れた街道の整備を行った。
- (2) 金銀の貨幣をしっかりと定め、通貨の安定を図った。
- (3) 京都所司代に板倉勝重を置き、朝廷とのパイプ役を担わせた。
- (4) 庶民への娯楽提供のため、活版印刷による出版事業を始めた。

## 解説

家康公による「戦国からの転換」は経済・流通政策から始まったと考えられます。五街道の整備を始め、宿駅伝馬制度の確立、金や銀を使った国産通貨の鋳造などです。一方で、武士たちに対する教育の一環として、三要元佶を開基とした伏見の圓光寺で、日本における初期の活字本の一つである「伏見版」の印刷出版事業が行われました。元佶は足利学校(足利市)の校長だった人物です。



木活字(圓光寺蔵/京都市)

## 問題78

慶長8年(1603)、家康公は征夷大將軍に任じられ江戸幕府を開きました。家康公は、秀忠に念願の男子が誕生し(後の家光)、懸案であった朝鮮国との国交が回復すると、將軍職を秀忠に譲ります。家康公が將軍だった期間はおよそどれだけだったでしょうか？

- (1) 半年間
- (2) 2年間
- (3) 5年間
- (4) 12年間

## 解説

中国の歴史書『明史』の第208項『朝鮮』の記述に「秀吉死我軍尽撤、欲與倭通款…」と記されています。秀吉の死後わが軍(明軍)が撤退すると、朝鮮国は日本国との通商を欲した、という意味です。家康公も朝鮮国との国交回復を強く望んでいました。慶長9年(1604)、朝鮮国は僧の松雲大師を日本に送り、徳川家康・秀忠父子と伏見で会見、速やかな修好回復を希望したと伝わります。翌年、家康公は將軍職を秀忠に譲り、自らは大御所となって政治の一翼を担うことになりました。



松雲大師像(韓国)

**問題79**

慶長12年(1607)駿府城に移った家康公は、平和国家を維持させるため、外交から民政までの幅広い専門家を集め、265年の長きにわたり戦のない江戸時代の礎になる政治を実施しました。なんといわれる政治でしょうか？

- (1) 院政 (2) 大御所政治
- (3) 執権政治 (4) 摂関政治

**解説**

江戸城の将軍 秀忠は主に譜代大名と関東地域の支配を、西国大名に対しては駿府城の大御所 家康がその役割を担当しました。家康公は京都所司代の板倉勝重に朝廷との交渉役を、本多正純に政策立案を行わせました。また大久保長安・成瀬正成・安藤直次・村越直吉を奉行衆として、金地院崇伝と南光坊天海に寺社関係、儒者 林羅山を教育関係に登用しました。外国人のウィリアム・アダムズやヤン・ヨーステンを外交顧問とし、ブレーンとして大御所政治に活用したのです。



板倉勝重像(長圓寺蔵/西尾市)

**問題80**

家康公は、最後の戦いである「大坂夏の陣」を終結させると、これからの武士の規範として「武家諸法度」を制定します。それは「領民への善政」を目的とし、新しい平和な時代の武士のあり方を示したものでした。次の一文は、どのような意味でしょうか。

一、文武弓馬ノ道、専ラ相嗜ムベキ事

- (1) 文武を両立せよ
- (2) 弓術や馬術を磨いて武力を強化せよ
- (3) 学問か武術、どちらかに専念せよ
- (4) これからの武士には弓術や武術は不要だ

**解説**

良く知られる武家諸法度で最も大切な部分は、新しい時代の武士のあり方を示した冒頭の部分でしょう。「文武両立」というのはこの時に初めて生まれた概念で、現在でもスポーツ選手などに当てはめて使われる言葉です。武芸だけが秀でた武士というのではなく、民の暮らしのために役立つ武士に、という内容も出てきます。江戸平和社会の根底にあった武士の世の政治哲学です。



武家諸法度(国重文/京都金地院蔵)

## 問題81

家康公を祀る日光東照宮の大造営を終えた三代将軍家光は、先祖の地である岡崎にも東照宮を造営しました。東照宮は源氏ゆかりの寺社の境内に造営されましたが、なんという寺社でしょうか？

- (1) 大樹寺 (2) 瀧山寺  
(3) 龍城神社 (4) 天恩寺

## 解説

日光東照宮を造営したのが、将軍家光のブレンでもあった天海僧正です。天海は江戸上野に天台宗の寛永寺を創建し、浄土宗鎮西派の増上寺と共に将軍の墓所としました。家光から岡崎の地に東照宮建立を命じられた際、東照宮は寛永寺と関係の深い天台宗の瀧山寺に、家康公を始めとする将軍の位牌は浄土宗鎮西派の大樹寺に御霊屋を建立して安置するように決定したと伝わります。いずれにしろ家康公生誕の地 岡崎が重要視されたことが窺えます。



瀧山東照宮(国重文/岡崎市)

## 問題82

江戸前期、主に関東で活躍した伊奈忠次は三河出身の武士です。出身地はどこでしょうか？

- (1) 小島城……西尾市 (2) 竹谷城……蒲郡市  
(3) 中島城……岡崎市 (4) 野田城……新城市

## 解説

小島城はもともと荒川氏の支城だったと伝えられますが、家康公が西三河に支配権を広げるころには伊奈忠次の父が城主となっていました。忠次は父の跡を継いで城主となりましたが、天正18年(1590)、家康公の関東移封に伴い武蔵国へ移住したため、小島城は廃城となりました。現在は矢作川と矢作古川の分岐する地点、西尾市小島町に城跡が定められています。古くから矢作川がよく氾濫する地であったようで、領主でもあった忠次は治水や土地、新田の開発を行っていたのでしょう。



小島城跡(城山稲荷碑/西尾市)

## 問題83

伊奈忠次の業績として正しいのはどれでしょうか？

- (1) 小田原の北条攻めでは先陣を切り、支城のにら葺山城を攻略する活躍をした。
- (2) 関東や東北の外様大名の検地を行い、各大名とごまの実際の石高を調査した。
- (3) 利根川や荒川の流路を変えるなど多くの治水、しんでんかい新田開発事業を行った。
- (4) 関東の代官頭として江戸城や日光東照宮の造営を指揮した。

## 解説

伊奈忠次は関東の代官頭として各地の検地、新田開発、河川改修を実行します。特に、利根川や荒川の流路を変える付替え工事や検地による家臣たちの知行割など、家康公の関東支配を強力に推し進めました。このことは後に江戸幕府の財政的な基盤の確立に大きな影響を与えます。関東の各地には「備前渠」「備前堀」「備前堤」など「備前」という官職名を使った名が残されています。伊奈備前守忠次による土地改良であることが、多くの人々から顕彰されているのです。



備前堀の伊奈忠次像(水戸市)

## 問題84

家康公が薨去して100年後の享保元年(1716)、八代将軍吉宗のもとで江戸町奉行として活躍したのが大岡忠相です。彼の業績として、次のなかで正しくないものはどれでしょうか？

- (1) 裁判記録の「大岡政談」を編纂・発行した。
- (2) 庶民の訴えを聞く「目安箱」を設置した。
- (3) 防火体制を強化するため「町火消組合」を創設した。
- (4) 貧民救済のため「小石川養生所」を設置した。

## 解説

大岡忠相が有名になったのは映画やドラマに拠るところが大きいです。あの名奉行ぶりは江戸末期に創作された「大岡政談」がもとになっています。忠相は吉宗に江戸町奉行として抜擢され、都市政策、司法に携わり、「目安箱」の取り扱いを定めたりしました。後に「公事方御定書」(役人の行動規範や裁判の判例)の編纂に携わる一方で、江戸の防火体制を強化するため「町火消」を創設したり、貧病人のために小石川養生所を設置したりしました。



大岡忠相像(「大岡政談」より)

## 問題85

名奉行 大岡忠相を藩祖とする西大平藩<sup>にしおおひらはん</sup>は岡崎<sup>おかざき</sup>市に陣屋<sup>じんや</sup>を置きましたが、大岡家は関東移封の際、相模<sup>さがみ</sup>（神奈川県）に知行地<sup>ちぎょうち</sup>を与えられており、忠相ははじめ歴代藩主の墓は、相模の浄見寺<sup>れいきだい</sup>にあります。岡崎市と「ゆかりの町」提携<sup>ていけい</sup>をしているこの相模の地は現在のどの都市でしょうか？

- (1) 小田原市<sup>おだわらし</sup>                      (2) 鎌倉市<sup>かまくらし</sup>  
 (3) 茅ヶ崎市<sup>ちがさきし</sup>                      (4) 藤沢市<sup>ふじさわし</sup>

## 解説

岡崎市には「西大平陣屋（大岡陣屋）」が置かれていましたが、陣屋とは江戸時代の大名領（藩）の藩庁が置かれた役所を意味しています。特に領国と城を持たない江戸詰めの小禄大名や旗本たちは、知行地が各地に分散しており、それぞれの知行地ごとに陣屋を設置したのです。大岡氏はもともと茅ヶ崎が知行地でしたが、忠相の活躍を受けて、三河の地に4000石を加増され西大平藩1万石の大名となりました。この縁が現在の「ゆかりの地」としての縁になっています。



大岡家墓所（浄見寺／茅ヶ崎市）

## 問題86

幕末の文久3年（1863）、若年寄<sup>わかどしより</sup>に出世した三河奥殿藩主<sup>おく</sup> 松平乗謨<sup>ぼくまつ</sup>（後の大給恒<sup>おんきゆう</sup>）は、藩庁<sup>のりかた</sup>を信濃国<sup>しなのくに</sup> 田野口<sup>たのくち</sup>に移し、函館五稜郭<sup>はこだてごりやうかく</sup>とならぶ星形要塞<sup>ようさい</sup>の竜岡城<sup>りゅうおうじょう</sup>を築城しました。岡崎市と「ゆかりの町」提携<sup>ていけい</sup>をしているこの田野口藩は現在のどの都市でしょうか？

- (1) 飯田市<sup>いいだし</sup>                                      (2) 上田市<sup>かみだし</sup>  
 (3) 佐久市<sup>さくし</sup>                                      (4) 松本市<sup>まつもと</sup>

## 解説

幕府の大番頭から若年寄に出世した松平乗謨は、藩庁を奥殿から信濃国田野口に移しました。今の長野県佐久市です。若い時から望んでいた城の建設が、奥殿では手狭で不可能だったからというのが最大の理由として挙げられています。領民たちは藩庁替えに反対しましたが、国家老 海保保典の必死の説得もあり納得したと伝えられます。田野口に移った乗謨は、早速、幕府の許可を得て、大砲での戦いを想定した西欧式星型要塞の竜岡城を築城したのです。



竜岡城の礎部（長野県佐久市）

## 問題87

明治になり、大給 恒は日本赤十字社の前身となる博愛社を創設しますが、その契機となった不平士族の大規模な反乱をなんというのでしょうか？

- (1) 会津戦争 (2) 西南戦争  
(3) 日清戦争 (4) 戊辰戦争

## 解説

明治10年(1877)に現在の熊本・宮崎・大分・鹿児島県で、西郷隆盛を盟主にして起こった士族による武力反乱が西南戦争です。近代化を進める明治政府は前年に廃刀令、金禄公債証書発行条例(秩禄処分)を發布しました。この2つは旧武士階級の特権を奪うもので、士族の間に不満が広がりそれが爆発したのです。九州地方や山口県で広がったのは、討幕を進めた張本人たちだったからでしょう。この戦いの最中、博愛社を設立し、敵味方の区別なく傷兵を救ったのが、旧幕府の陸軍総裁であり、三河譜代の末裔であったことを再認識したいものです。



西南戦争での博愛社(熊本市)

## 問題88

その昔、諸国遍歴中の松平初代 親氏に「ウサギ汁」を振舞った吉縁で信州松本から三河に呼ばれ、戊辰戦争では最後まで徳川家を守って徹底抗戦し、明治新政府により改易された唯一の藩となった林家の上総請西藩は、現在のどの都市にあった藩でしょうか？

- (1) 茨城県結城市 (2) 埼玉県川越市  
(3) 千葉県木更津市 (4) 千葉県成田市

## 解説

現千葉県木更津市に陣屋を置いた請西藩は、1867年に林忠崇が家督を相続しました。「最後の大名」と呼ばれた請西藩主です。戊辰戦争が始まると、上総に転じた遊撃隊(幕府の親衛隊)に、藩主 忠崇は自ら脱藩して家臣たちとともに加わりました。房総や相模で新政府軍と戦った後、旧幕府勢力の抵抗する東北各地を転戦します。敵対する忠崇の行動は新政府の怒りを買ひ、明治元年(1868)に改易となりました。請西藩は戊辰戦争によって改易された唯一の藩となりました。

最後の請西藩主林忠崇  
(個人蔵)

## 問題89

関ヶ原の戦いを征し江戸幕府を開いた徳川家康公。  
 まだ西国に戦の空気が漂う不穏な時代、東海道の  
 西国の入口に最強の三河武士、本多忠勝が来て、  
 この町に「慶長の町割り」を遺しました。

このまちとは今のどの都市でしょうか？

- (1) 愛知県名古屋市 (2) 岐阜県大垣市  
 (3) 滋賀県大津市 (4) 三重県桑名市

## 解説

関ヶ原の合戦後、新たな大名配置で桑名に入ったのが本多忠勝でした。その頃の桑名は、町屋川と大山田川が町中に流れ込んで、三つの州をつくり、そのなかに町があるという状況であり、忠勝は町屋川の流れを付け替え、州の状態をなくしました。町は城を中心にして、武士の町、その外側に商人の町をつくり、城下町の外郭は堀で囲みました。また、商工業者を集めた町もつくられ、住みやすい町に変えたと伝わります。これが「慶長の町割り」で、現在も桑名市の中心部でその名残を見ることができます。



桑名市の水路(桑名市)

## 問題90

徳川四天王の一人、酒井忠次。その子孫が代々治世に励み、幕末期に幕府から転封を命じられたものの領民が反対運動を繰り広げ、ついに転封が撤回となったその領地。藤沢周平の時代小説では「海坂藩」としてしばしば登場するこの町は、現在のどの都市でしょうか？

- (1) 愛媛県松山市 (2) 千葉県大多喜町  
 (3) 長野県伊那市 (4) 山形県鶴岡市

## 解説

酒井忠次の子孫が藩主となった鶴岡藩(庄内藩)は、井伊家の彦根藩と同様、江戸時代を通して藩主が変わることなく明治を迎えた藩です。藩史には藩主・家臣・領民の結束が固いと記されていますが、これは本間四郎三郎による藩政改革以後、領民を手厚く保護する政策がとられ続けたからだと考えられます。領民もこれに感謝の念を抱いており、戊辰戦争での武士・領民一体となった戦いや、後の藩主召還の献金などが行われたのです。作家 藤沢周平もこの鶴岡出身です。



致道博物館(酒井家旧跡/鶴岡市)

## 問題91

岡崎市と親善都市提携を結んでいる広島県福山市。福山藩初代藩主であり、「鬼日向」の異名を持つ猛将で知られる一方、城下町建設や産業育成、治水事業などを積極的に行い、今日の福山市発展の礎を築いた、家康公の従弟にあたる武将はだれでしょうか？

- (1) 池田輝政 (2) 藤堂高虎  
(3) 本多忠勝 (4) 水野勝成

## 解説

水野勝成は黒田官兵衛孝高や立花宗茂など、仕官先を8度も変え、豊臣秀吉死去の後には家康公に従ったと伝えられます。「戦国自由人」ともいえる武将ですが、大きな戦の度に武功を挙げ、江戸開幕後は三河刈谷、大和郡山城主を経て、最後は福山藩10万石の大名となりました。領民には名君として慕われ、問題文にあるような様々な事業を行っています。



福山城天守(福山市)

## 問題92

「徳川の恩義を忘れず」という「義」の越後長岡藩。戊辰戦争では新政府軍に徹底抗戦しました。太平洋戦争の末期、8月1日の激しい空襲で多くの市民が犠牲になり、その鎮魂、供養のため、毎年同日同時刻に慰霊の白菊大輪の花火を打ち上げ、その翌2日と3日は立派な花火大会を開催しています。「常在戦場」の言葉とともに、その深い精神を遺した譜代の藩主家はどこでしょうか？

- (1) 奥平家 (2) 菅沼家  
(3) 戸田家 (4) 牧野家

## 解説

三河国牧野氏は徳川家の三河譜代家臣で、子孫が譜代大名として、越後国長岡藩主、信濃国小諸藩主、常陸国笠間藩主、越後国三根山藩主、丹後国田辺藩主を勤めました。特に長岡藩は幕末に家老の河合継之助が登場し、幕府に義を尽くして最後まで戦います。また「常在戦場」の額が、藩主の子孫である山本五十六(海軍大将)の生家に掲げてあります。



「常在戦場」額(山本五十六生家/長岡市)

## 問題93

家康公から拝領した南蛮具足を身に着けた肖像画が伝わる「槍の半蔵」の異名を持つ部将で、晩年は尾張藩 徳川義直の付家老として三河 寺部城(豊田市)を領有した人物は誰でしょうか？

- (1) 成瀬正成 (2) 服部正成  
(3) 平岩親吉 (4) 渡辺守綱

## 解説

家康公には「二人の半蔵」がいました。「鬼半蔵」の服部正成、そして「槍半蔵」の渡辺守綱です。守綱は現在の碧海郡浦部村(岡崎市国正町付近)の出身です。家康公と同じ年であり、若いころから傍に仕えました。永禄5年(1562)の三河国八幡の合戦(豊川市)で、敵方の追尾を得意の槍で退けたことから「槍の半蔵」という呼び名を受けるようになります。数々の合戦で武功を挙げ、晩年は尾張藩付家老として、成瀬氏の犬山城主と同様、寺部城主としての待遇を受けました。



渡辺守綱像(守綱寺蔵/豊田市)

## 問題94

家康公の関東移封に伴い、箱根を守る要所である小田原4万石の大名となった岡崎市上和田町生まれの三河武士はだれでしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 大久保忠世  
(3) 内藤家長 (4) 本多正信

## 解説

大久保家は大変古くからの譜代家臣で、忠世は家康公の旗本先手役大将として数々の軍功を挙げました。五ヶ国統治時代には信州総奉行として小諸城にあり、小牧の陣で秀吉の目に触れなかったことから、三傑(本多忠勝、榊原康政、井伊直政)のように、関東移封後に10万石以上の扱いを受けられなかったのではと考えられます。しかし4万石でも徳川家では有数の高禄で、箱根という重要な地を守ったのです。



大久保忠世像(小田原城博物館)

## 問題95

徳川四天王の一人として活躍した榊原康政ゆかりの4市では、昭和60年(1985)より、毎年、「榊原サミット」を開催し、文化交流を図っています。その4市とは、生誕の地、三河国上野郷のある豊田市と、榊原家が江戸時代に藩主を務めた3市です。その3市とは、館林市(群馬県)、姫路市(兵庫県)とどこでしょうか？榊原家の最後の所領地、高田藩のあった都市です。

- (1) 上越市(新潟県)      (2) 下田市(静岡県)  
 (3) 高松市(香川県)      (4) 松江市(島根県)

## 解説

高田藩のあった上越市には、榊原康政を祭神とする榊神社があります。康政初陣の時に、大樹寺での学友であった神谷金七から渡された「茶糸素懸威黒塗桶側五枚胴具足(通称：ちぎれ具足)」「(上越市指定文化財)がその御神体です。「貧しい若者でも初陣の時の具足は必要であろう」と、少々綻んだ具足をもらい武功を挙げたのです。以来、戦の時には常に大切に傍に置いたと伝わります。



榊原康政祭神榊神社(新潟県上越市)

解答… (1)

## 問題96

東三河の統一期に、奥三河の作手地区において強い勢力を保っていた一族で、家康公の長女が嫁ぎ、江戸開幕期には、美濃国加納藩初代藩主、後に子孫が豊前国中津藩主となった一族は何氏でしょうか？

- (1) 奥平氏      (2) 西郷氏  
 (3) 菅沼氏      (4) 牧野氏

## 解説

長篠の合戦で武田の大軍から城を守り、功名を成したのが奥平貞昌です。貞昌はその後、家康公の長女 亀姫を娶り、さらに信長からは名前の一字をもらい受け信昌と改名したのです。奥平家は奥三河作手に本拠地を置く国人衆で、野田、田峯の菅沼氏と「山家三方衆」と呼ばれてきました。武田信玄の死去後には武田方から家康公に味方し、三河譜代として重きをなしていったのです。亀姫は、信昌が美濃加納藩主の時代は「加納御前」として慕われたと伝わります。



美濃加納城本丸石垣(岐阜市)

解答… (1)

## 問題97

江戸時代、「三河以来の家柄・・・」とは、家筋の信頼を表すもので、「三河」の屋号も安心を印象付けるものでした。幕末期の三河の藩は9藩(岡崎、西大平、西尾、拳母、刈谷、西端、吉田、田原、畑村)ありました。これらは藩の区別では次のどこに属すでしょうか？

- (1) すべて譜代 (2) すべて家門  
(3) すべて親藩 (4) すべて外様

## 解説

幕末期の三河9藩と藩主は、①岡崎藩(本多氏)、②西大平藩(大岡氏)、③西尾藩(大給松平氏)、④拳母藩(内藤氏)、⑤刈谷藩(土井氏)、⑥西端藩(本多氏)、⑦吉田藩(大河内松平氏)、⑧田原藩(三宅氏)、⑨畑村藩(戸田氏)です。これらの三河諸藩は明治になり全て「県」となり、後に「額田県」にまとめられました。藩主は全て譜代家臣たちであり、東海道でも重要な地域であったことが窺えます。戊辰戦争では尾張徳川家より、官軍に恭順するよう求められたといえます。



西大平藩陣屋跡(岡崎市)

解答… (1)

## 問題98

泰平な江戸時代が終わり、ご一新という近代日本を開いて73年後、1941年には太平洋戦争を起こした日本。その悲惨な太平洋戦争に敗戦し、二度と戦争をしない平和国家を宣してから今年で73年。悲惨を体験した人たちの声が遠ざかりつつあります。さて、徳川家康公が亡くなられてから73年後の江戸時代はどんな時代だったのでしょうか？

- (1) 天草の乱、由比正雪の乱が続いた混乱の時代。  
(2) さまざまな町人文化が花開いた元禄時代。  
(3) 重商主義の経済政策が推進された田沼時代。  
(4) 黒船来航。攘夷が開国かで揺れた動乱の時代。

## 解説

家康公薨去73年後は五代将軍 綱吉のころ、様々な産業や町人文化が花開く、百花繚乱の元禄期に入ったころです。文芸や学問・芸術の発展、特に豊かな経済力を背景に成長してきた町人たちが、大坂・京など上方を中心に優れた作品を数多く生み出しています。秩序紊乱の時代から泰平を謳歌する平和な時代に。家康公の元和偃武の思いを熟成させた73年間だったのでしょうか。



近松門左衛門「曾根崎心中」木版

解答… (2)

## 問題99

近代日本は、明治、大正、昭和、平成の150年を経て、新たな年号の時代を開こうとしています。私たちが創る時代はどんな時代になるでしょう。応仁の乱から150年後、二度と戦争のない国家日本でありたいと徳川家康公は平和悲願を年号に遺して、この世を去られました。その年号は何というのでしょうか？

- (1) 安政 (2) 慶安  
(3) 元和 (4) 元禄

## 解説

「元和偃武」。19歳の時に志を立てた言葉が「厭離穢土 欣求浄土」。その完結がこの言葉になるのでしょうか。現世浄土を実現させるために必要であった「武」を、その実現によって潔く偃せたのです。家康公臨終の際の遺言に、「たとえ他人天下の政務をとりたりとも、四海安穩にして万民その仁恩を蒙らば、これ元より家康が本意にして、いさゝか憾みおもふ事なし」とあります。「偃武」の潔さがこの一節に表されています。現代に生きる私たちが噛み締めなければならない言葉でしょう。



徳川家康公像(岡崎公園)

解答… (3)

## 問題100

公益財団法人「徳川記念財団」と「岡崎商工会議所」の主催で始まったこの検定。今回のテーマは、「わがふるさとは、三河」。日本各地から聞こえてくるこのテーマの声の主、その核心は「徳川」、ふるさと三河の根っこは「岡崎」。主催の両者が手を結び、全国各地に「ゆかり」の声を掛け合い、未来に向かって歴史に学ぶ示唆を探そうとしています。最終問です。150年前、幕末の全国の藩のうち、藩主が三河出身の藩は全体のおよそ何パーセントを占めていたのでしょうか？

- (1) 13% (2) 23% (3) 33% (4) 43%

## 解説

最終問は、この「新・家康公検定」の意義を受験者のみなさまと共に確認し合うものです。すでに第5問で、「わがふるさとは、三河」という藩がいくつあったでしょう、と問いかけ、その全国に占める比率は280藩中の120藩の余韻を残しながら検定を終え受験会場を出る、というものです。

改めて、江戸泰平社会が閉じて150年の今、その原点になった三河に視座を置き、みなさまと共に混迷する時代への明かりを見つけないといけません。



三河武士の館家康館(岡崎公園)

解答… (4)